

Dear Michi,

Thank you for your swift reply and interest in Teddies for Tohoku. I'll give an up-to-date explanation, but first I'll tell you about the T-shirts.

The Kuyo Ganmon T-shirt project was started 3 years ago by a good friend (and Hiraizumi guide) who was inspired by the poetry and the message of Fujiwara no Kiyohira's Kuyo Ganmon. Together we translated it into English and she found a local disabled centre that could produce either dark blue or white shirts with the words in gold. Production is limited, making the T-shirts more expensive than average, but it supports the disabled centre financially. The profits are to be used for an alternative Hiraizumi guidebook in English which we are working on. The T-shirts received good local publicity when first launched, and continue to sell steadily in local shops. Teddies for Tohoku is a slow, simple, ongoing effort. Friends and strangers have been very generous. I revise the message periodically and recently sent out the following one below.



Best wishes, Rosemary

せかいじゅうには、いろいろなサイズやいろいろな いろの くまさんのぬいぐるみがあります。みんな とくべつです。なぜ？ くまさんは、こどもたちがだいすきです。いつも、てをのばし、あなたを だっこしたいです。くまさんは、いつでも あなたの ささやきを きいて あげます。うれしいことも、かなしいことも、 なんでもくまさんに はなせます。このくまさんは、たくさんの くにのともだちからのプレゼントです。



I've lived in Japan for 30 years, 20 of them in Hiraizumi, Tohoku, but happened to be in England at the time of the March earthquake. With such catastrophic damage how could the children recover from the trauma? On my return, I bought 20 teddy bears at Heathrow, thinking they might help children who had lost loved ones and were faced everyday with shocking scenes of destruction. I wrote the following message to accompany the bears: "All over the world there are teddy bears of various sizes and colours. They are all special. Why? They love children. They always hold out their arms to hug you. They listen carefully when you whisper to them. You can tell them anything at all, sad things and happy things. These bears are a present from friends in many countries." Friends helped to gather more bears, and I joined a group of local volunteers who have been fantastically active in helping in many areas along the coast. We went to a kindergarten in Rikuzentakata but with over 80 children, we were unable to give them each a bear. One small lad was so endeared with the bears he rushed forward to grab one from another child. It was so sad. The second chance to give out teddies was at a summer holiday event for 75 kids of all ages, some with disabilities, in Ofunato. This time there were enough bears and the children chose the one they liked. There was a lovely moment when a boy with Down's syndrome rolled on top of them all because they looked so soft and cuddly (his embarrassed mother trying to pull him away). This is a very slow effort but the problem it addresses will not be healed soon. Whilst the world has moved on, people on the Tohoku coast have to live with their shattered world every day even though they are making herculean efforts to recover. Children could do with any kind of comfort, the sort that teddy bears can give.

For those who feel moved to help, teddy bears should be: tel.0191-46-4652

職責を全うした遠藤さんら、無事で

東日本大震災の被害を伝える本紙のある記事を読んだ。私も16年前の阪神大震災で激しい揺れを経験したが、この記事に涙が流れ、なんとも言えない気持ちになった。町は壊滅状態に陥り、人口の約半数に上る町民の安否が分からなくなった宮城県南三陸町の町危機管理課職員の遠藤未希さんの記事だ。

25歳の遠藤さんは地震後も役場別館の防災対策庁舎に残り、避難を呼びかける防災無線放送を続けた。地震から約30分後、高さ10m以上の津波が襲ってきて、行方不明になったという。「6m強の波があります。早く逃げてください。」という遠藤さんの放送の声を聞いて着の身着のまま避難した住民がいるとも報じている。予想をはるかに上回る大津波が迫ってくるなか、最後までマイクを握り締めて声を振り絞り「早く逃げてください」と絶叫した放送でどれだけ多くの住民が助かったかと思うと、胸が詰まる。公務員としての職責を全うしようとした遠藤さんの姿勢には頭が下がるばかりだ。遠藤さんら行方不明者の無事をひたすら祈っている。

無職 藤井正 80歳 (神戸市灘区) 「毎日新聞より」



難波様

ご無沙汰しております。素敵な写真、ありがとうございます。鮮やかな日本地図のグリーンが想像以上に素敵だったので、嬉しくなっていました!! おかげさまで、函館は本当に気候も過ごしやすく子どもが外で遊べる・草花に触れる・プールに入れる・水も飲める・雨にぬれても起こる必要のない環境に日々感謝しながら滞在させていただきました。写真は函館で、雨でも遊び続ける息子(黄色)です。笑しかも、この夏休みは、私たち親子にとって『ずっと一緒にいた時間』最高記録でもありました。赤ちゃんのころから働きはじめてしまい、叔母や祖母、保育所に預けてしまったので・・・今まで最長でもお盆と正月の一週間程度でしたから・・・。放射能は不運でしたが、そのかわりに貴重な体験をさせて頂いたような有り難い気持ちでいっぱいです。



函館から戻り、さっそく福島県飯館村(県内でも放射能値の一番高い村です)の避難所である仮設住宅へコミュニティバスを走らせる事業に取り組んでおりました。点に在しているため、村民同士の交流を繋ぎたいと思っています。

また、函館で体力回復したはずの息子が気管支炎・肺炎になり・・・あわただしく過ごしておりました。今後も何かありましたら、メール頂けるとうれしいです。それでは、また。



小林由有紀

*小林由有紀さんは絆プロジェクトのTシャツをデザインされた方です。

寒くなってきたから半袖のTシャツはもう着なくなるだろうが、今年中尊寺の供養願文の英訳をプリントしたTシャツを機会あるごとに着た。藤原清衡が建立の際に祈念した願文。平泉在住の千葉ローズマリーさんから頂戴したもので、英訳も彼女がしている。

私はこれまで一度たりとスローガンをプリントしたTシャツ一枚で外に出たことはない。世界を一つに、とか、地球が大好き、とか、なにか恥ずかしい気がするし、そもそも私の年齢でTシャツ一枚の格好は似合わない。

せっかく頂戴しても、と最初は思ったのだけど、よく見ると長い文面なのでストレートなスローガンとは映らない。デザインもシンプルだ。これならと着てみたら効果抜群だった。

会う人のほとんどが旨の文字に関心を示す。簡単な文章ではないから私に訊ねる。清衡が世界の恒久平和と万民平等を祈念した供養願文の一説だと説明すれば皆が大きく頷き、しばらく清衡の話となる。

日常会話の中でこのように自然に清衡や平泉分かんについて触れるなどあまり経験のないことだ。なるほど、これは便利なものだ、と感じた。

大学浪人中、読み終えた泉鏡花や鶴屋南北の全集の一冊を手にして歩いてい た自分を思い出す。余裕とかセンスのあるやつ、と仲間にも思われたいがための演出であった。それとはむしろ動機は違うにしても自分の思いや立場を示す道具となる。

以来、Tシャツに刻まれたスローガンを好意的に眺めるようになった。頑張ろう岩手の文字を胸にする若者に、とりあえず振り込め詐欺の犯人はいないだろう。後ろめたさに袖など通せない。「皆は一人じゃない」の文字を堂々と胸にする若者は、間違えなく仲間たちに恵まれている。楽しい仲間がそばにいてこそ、この言葉を実感できる。

だったらもっともっとスローガンを細分化して効果を高めるやり方も可能なのではないかと考えた。今は互いのコミュニケーションが取りにくい時代だ。価値観も異なる。自分がなにを考え、それがTシャツにかかれていれば仲間を得やすくなる。

たとえば平泉を歩きつつ「義経北行伝説が好き」というTシャツなら、同じ興味を持つ者たちがきっと声をかけてくる。少なくとも供養願文の英訳のTシャツを着ていれば外国の観光客が親しみのこもった笑顔をみせるだろう。それは確かだ。 「朝日新聞より」